

令和 3 年度

横浜市立高等学校
及び
併設型中学校
自己評価書

横浜市立横浜サイエンスフロンティア
高等学校附属中学校

<学校情報>

1 課程・学科 全日制課程・理数科

2 学校長 永瀬 哲 (令和3年4月1日現在 在職3年目)

3 学校教育目標

- 1 広い視野、高い視点、多面的な見方を身につけさせ、ものごとに対する柔軟な思考力・解析力を培い、論理的頭脳を養う。
- 2 旺盛な探究力、豊かな創造力、世界に通じるコミュニケーション能力、自立力を培うことによって、よりよく生きる知恵を養う。
- 3 社会における己の使命を自覚し、積極的に社会に貢献しようとする志を養う。
- 4 人格を陶冶し、有為な社会の形成者としての品格を養う。
- 5 幅広い知識と教養を身につけ、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな心身を養う。

4 教育方針

驚きと感動による知の探究

《教育理念》

学問を広く深く学ぼうとする精神と態度を培いながら、生徒一人ひとりが持つ潜在的な独創性を引き出し、日本の将来を支える論理的な思考力と鋭敏な感性をはぐくみ、先端的な科学の知識・技術、技能を活用して、世界で幅広く活躍する人間を育成する。

5 教職員数 (令和3年12月1日現在)

学校長 1 校長代理 1 副校長 1 事務長
教諭 15 (男 10、女 5) 養護教諭 1
実習助手 事務職員 1 技能職員
A E T 1 非常勤講師 5 管理員

6 生徒在籍数 (令和 年12月1日現在)

学年	学級数	男子	女子	合計
1	2	40	40	80
2	2	40	40	80
3	2	40	40	80
4	0	0	0	0
合計	6	120	120	240

7 回収率

		依頼数	回答数	回収率
教職員		19	19	100 %
生徒	1年	80	78	98 %
	2年	80	77	96 %
	3年	80	77	96 %
	4年	0	0	0 %
	合計	240	232	97 %
保護者		240	228	95 %

8 自己評価実施日

教職員	令和3年12月1日～令和3年12月10日
生徒	令和3年12月1日～令和3年12月10日
保護者	令和3年11月1日～令和3年11月19日
地域	令和3年11月15日～令和4年1月13日

9 集計・分析期間

令和3年12月15日～令和4年2月9日

10 自己評価書の公表方法・時期

○集計結果は令和4年1月下旬、分析については、令和4年5月中旬以降
本校ホームページで公表の予定

1 第3期横浜市教育振興基本計画の推進状況

□魅力ある高校教育の推進状況

(関連アンケート番号：教職員 1, 2, 3, 9, 10, 13, 14 生徒 I-1, 6 保護者 I-1 II-1
経年変化 1, 2, 5, 10)

取組	<ul style="list-style-type: none">○中高一貫教育による国際社会で活躍する人材の育成に向けて、6年間の計画的で継続的な教育活動の充実・推進に努めている。○「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受け、「先端科学技術の知識を活用して、世界で幅広く活躍する人間の育成」を目標としている横浜サイエンスフロンティア高校の附属中学校として、グローバルリーダーたる*1「サイエンスエリート」の育成を図っている○高等学校の*2サイエンスリテラシーにつながるサイエンススタディーズ（総合的な学習の時間）やフロンティアタイム（本校独自の週2時間の授業。自主研究、読書活動、進路探究、相談・面談等を通して豊かな感性を育み、自分自身を開拓する時間。）を核とした教科等横断的なカリキュラム編成を行うとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善を進めている。○「サイエンスエリート」に必要な*3「サイエンスの考え方」を育むために、次の4つのフェーズ 「Discussion」……物事を正確に捉えて考察し討議する 「Experiment」……仮説を立てて論理的に実証する 「Experience」……フィールドワークなど実体験から学ぶ 「Presentation」…自分の考えや意見を正確に相手に伝える を繰り返すDEEP学習を授業に取り入れ、探究心を養いながら知識と智慧のサイクルのスパイラルアップを図っている。○中高一貫教育のさらなる充実を図るため、国語、社会、数学、理科、英語、技術・家庭及び保健体育の授業で少人数授業又はチームティーチングを行い、中学と高校の教員が連携して指導している。○令和3年度も引き続き、本校に関わる外部機関（研究機関・大学・企業等）と連携しての教育活動及びICT機器（タブレット等）の活用の充実を図ってきた。 <p>*1…次世代の日本を担う使命感を持ち、科学的リテラシーを身につけ、物事をやり通す強い精神力や活動の源である体力を備えた国際社会で活躍する人材。</p> <p>*2…スーパーサイエンスハイスクールの課題研究型授業。1年次で科学的な見方・考え方、探究活動の基礎を学び、2年次に課題研究を行う。</p> <p>*3…サイエンスを学ぶことによって培われる考え方。正確な観察や実験、体験、情報の整理・分析などを合理的・総合的に進めるもので、科学のみならず、様々なものの考え方の基本につながる。</p>
----	---

成 果

- 教職員アンケートにおける「(教育課程・取組)学習指導要領の趣旨及び横浜市の方針に基づき、さらに中期学校経営方針に掲げた目標の実現を目指して編成し、取り組んでいる」は、新学習指導要領改訂の影響で理解がまだ進んでおらず減少しているが「(教科指導・評価評定)観点別評価規準を明確にした年間計画を立て、それに基づき適切な方法で評価・評定を行っている。」の経年変化は「十分に実現できている」「おおむね実現できている」の回答がほぼ維持できている。今年度も引き続き、新学習指導要領の全面実施において、教職員が取り組むべき内容をしっかりと理解・共有し、実践している結果である。(1ページ教職員アンケート3,4,6)
- 生徒アンケート項目「学校は生徒の健康管理について適切な指導をしている」において96%が肯定的な回答である。今年度より、生徒の資質・能力と各教育活動の教育効果を定量化する評価ツール「A i G R O W」を活用し、生徒の集団での位置づけや関わりの特徴などを参考に支援することができている。(3ページ生徒アンケートI教育活動について1)
- 生徒アンケート項目「学校は生徒の健康管理について適切な指導をしている」において94%が肯定的な回答で、そのうち55%が「そう思う」と令和2年度よりも向上している。コロナ禍にあっても学校として生徒・家庭に情報を提供し、令和2年度に引き続き適切に対応することができていると考えられる。(4ページ生徒アンケートII学校生活等について6)
- 保護者アンケート項目「様々な教育活動を通して、先端科学技術の知識を活用して、世界で幅広く活躍する人材を育てている」において、令和2年度同様に90%近くが肯定的な回答である。基盤形成期である中学生が、質の高い経験や豊かな感動を仲間とともに経験し、科学の楽しさや知る喜びに気付き、充実発展期である高等学校へつなげるために、本校の特色であるDEEP学習やサイエンススタディーズ、フロンティアタイム、校外研修などの教育活動を充実させていることについて「便り」や保護者説明会、ホームページ等の機会を活用して周知し、保護者の理解を得ることができている結果である。(7ページ保護者アンケート教育活動等についてI-1)
- 高校の教員も附属中学校の教科指導や特別活動、部活動指導等を行うことを通して生徒や保護者に対する理解が深まるとともに、6年間を通したカリキュラム・マネジメントを行うことにより、学習指導や学習評価についても年間を通して3回の研修を行い、さらには日々のOJTで中学の教員と共有することができている。
- 高校の開校以来にわたって蓄積してきた高校のリソースや経験を生かして、外部の研究機関・大学・企業の支援を受けて総合的な学習の時間である「サイエンススタディーズ」としての出張授業や事業所見学等を実施した。また、グローバルサイエンスキャンパスや各種コンテスト等に積極的に応募・参加したりしている。このことは附属中学校から高校に進学した生徒が積極的に活動する基盤となり、良い傾向となっている。

<p style="text-align: center;">課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者アンケート項目「様々な教育活動を通して、先端科学技術の知識を活用して、世界で幅広く活躍する人材を育てる」、「生徒の健康管理に関する適切な指導が行われている」の「そう思わない」、「分からない」が10%前後で、特に1年生の保護者の値が高い傾向にある。取り組んでいる様々な活動の情報が、校内外へより一層伝わるように、定期的なHP掲載をし、適切に情報を提供していくことが必要である。また、情報を発信していることを学校だよりなどでも家庭に伝えていく必要がある。（7ページ保護者アンケートⅠ教育活動等について1、Ⅱ学校生活について1） ○中高一貫教育を推進するために、高校の教員が中学校の授業や特別活動、部活動等の指導を担当するとともに、生徒会活動や学校行事を中高合同で実施している。SSHとしても中高一貫を柱の一つにしており、中高の教員が一体となって中高一貫教育を推進するための適切な人事配置と人材の育成が課題である。
<p style="text-align: center;">改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○令和3年度に引き続き、コロナ禍においても生徒の安全、感染症予防対策を図り、外部の研究機関、大学、企業と連携、協働し、積極的な「ほんもの体験」、またプログラムの方法については、オンラインも含めた多様な方法となるよう検討を行う。 ○生活・保健指導部を中心に、ICTを活用した毎朝の健康チェックの厳守、それに伴い統計的に生徒の健康状態を把握し、教育活動にメリハリをつけて運営していく。 ○HPのダイアリーや学年だより、メール配信を活用して、保護者へタイムラグのないように情報を発信し、学校と家庭の情報の共有、さらには協働的な生徒への支援を促していく。 ○学校関係者評価においても、「附属中学校の『サイエンススタディーズ』や『DEEP学習』、『フロンティアタイム』などの充実について高い評価をいただいている。高校の『サイエンスリテラシー』に接続させるためにも、上級生と下級生や高校生と中学生が学び合うためにも、フロンティアタイムではバディ制による縦割り活動を入れ、サイエンススタディーズにおいてもバディ間による研究発表、意見交換を行う。また、中学の研究についても高校のサイエンスリテラシーの先端科学6分野に基づき、構造的に組み込んでいく。また、その結果をAiGROWを活用し、数値的に評価し生徒の育成に生かしていく。 ○様々な研修や分掌会議、教科会議を活用し、YSF全体としての教職員の「融合」を推進し、カリキュラム・マネジメントを進めるとともに、本校の特色である課題探究について、SSH事業に位置付ける中でより一層の充実を目指して、質の高い経験や豊かな感動を仲間とともに経験し、科学の楽しさや知る喜びに気付けるよう支援していく。

2 教育活動の状況

□教育課程の状況

(関連アンケート番号：教職員 2, 3, 4, 5, 6, 18 生徒 I-1, 9 保護者 I-2)

<p>取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○教育課程・取組に関しては、学習指導要領の趣旨及び横浜市の方針に基づき、さらに中期学校経営方針に掲げた目標の実現を目指して編成し、中高一貫校教育校としての教育活動を積極的に推進した。また、教育課程を展開していく上で、クロームブックを活用した多様な授業や校内・校外との遠隔授業の実践を行った。 ○「サイエンスの考え方を養う」「豊かな社会性や人間性を育む」「次代を担うグローバルリーダーを育てる」を基本方針とした教育課程を編成した。 ○中高一貫校教育の特色を生かし、6年間の継続的な学びを行うために、6年間の前半3年間の「基盤形成期」（中学校1～3年）と位置づけて教育課程を編成した。 ○各教科では、探究力を育てる授業として内容を深く掘り下げ、生徒の興味・関心を引き出すDEEP学習を進め、討議、体験、実験実習、発表の場面を多く設定し、学習を深めている。 ○総合的な学習の時間に実施する「サイエンススタディーズ」は、自然科学や社会科学を核とした課題探究型の学習として、本校独自の教育課程を編成している。1年生では、地層見学やコミュニケーション研修を行った。また、2年生の課題研究に向けて、課題設定の仕方について学んだ。2年生では、一人1テーマの課題研究を行い、調査・実験から得た考察をレポートにまとめ、その内容を論文にまとめた。3年生では、2年生での個人研究の経験をもとにチーム研究に取り組み、論文にまとめ、さらに発表に向けた資料づくりを行った。研修旅行にて倉敷天城中学校との科学発表交流を予定していたが、実現することができなかった。学年末には、3学年合同によるサイエンススタディーズ発表会を校内で実施した。
<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○学校評価アンケート【保護者】、「I.教育活動等について」の各項目でおおむね80%の肯定的な評価を受けており、特色ある教育課程の展開による教育活動が生徒を世界で幅広く活躍する人材育成に繋がっているものと受け止められている。 ○DEEP学習、サイエンススタディーズの課題解決学習やプレゼンテーションを高い頻度で行ってきたことにより、1年生の「読解力」「情報活用力」「課題設定力」「課題解決力」「発表力」は着実に育成されており、2年生で課題研究を通してさらに力を伸ばしてきている。 ○学校評価アンケート【教職員】、3, 4, 5, 6の項目で、肯定的な評価の合計はおおむね70%以上であり、教科指導においては、生徒の実態に合わせた工夫がされており、生徒にとって分かりやすい授業展開がなされていると判断できた。
<p>課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○令和4年度には附属中学校より本校高等学校へ進学した生徒が高校3年生となる。附属中学校で育成した資質・能力を高等学校で十分に発揮することができていない生徒も散見されることが課題として出てきている。中高一貫教育を生かした学びにつながるようにするために、教科指導や指導計画には細部において改善の余地があり、カリキュラムマネジメントを継続的に行っていくことが必要である。

改善策	<ul style="list-style-type: none"> ○「サイエンスの考え方を養う」「豊かな社会性や人間性を育む」「次代を担うグローバルリーダーを育てる」という本校の基本方針を中高で再確認し、中学の「サイエンススタディーズ」と高校の「サイエンスリテラシー」を軸に6年間の一貫した教育課程について、議論を深める。 ○特に本校の特徴である課題探究に関しては、ICTを活用し、学年の枠や中高の枠を超えた取組や協働が実現するような工夫を考えていく。
-----	--

□生徒指導・教育相談の状況

(関連アンケート番号：教職員 9 生徒 6 保護者Ⅱ-1)

取組	<ul style="list-style-type: none"> ○規範意識を高めるとともに生徒の自主性を伸ばすことを目指した生徒指導を行った。 ○コロナ禍において誰もが・安心して・安全な学校生活を送ることができるよう、G o o g l e f o r mを用いた毎日の健康観察の徹底、石鹸を使用した手洗い及び手指消毒の励行、新しい生活様式についての保健指導等を行った。 ○コロナ禍のため、学年行事や学校行事が例年と違う形になることが多かったが、できないことではなく、できることを考えて実践することの大切さを繰り返し指導した。 ○分散登校時は、生活リズムが乱れないように、登校する時間と同じ時間帯で朝の学活を行い、生徒の健康や、心の変化などに気づけるようにした。 ○年間を通して教育相談を実施することで、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い分散登校となった場合等に、生徒の心身への影響にすぐに気づくことができるようにした。また、相談相手も担任のみに限定せず学年担当の職員も加わり幅広く相談できる体制を整えた。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ○教員に言われる前に自分で考え行動できる生徒が増えてきた。 ○生徒は、黙食の徹底や手洗い・手指消毒を積極的に行うなど新型コロナウイルスの感染防止を意識して学校生活を送っている。 ○コロナ禍でもできることを考え、実践する姿勢が培われた。 ○教育相談を通じて、生徒と教員の相互理解が深まった。 ○生徒が困ったり悩んだりした時に、幅広く複数の職員が相談を受けられる体制をつくることができた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ○コロナ禍という特別な状況なので、生徒一人ひとりの変化に気づけるように、細心の注意を払って生徒と接していく必要がある。 ○生徒の規範意識をさらに向上させていくような、取組を継続して行っていく必要がある。

改善策	<ul style="list-style-type: none"> ○年に3回実施している教育相談アンケートや、担任・副担任が中心で実施している教育相談を通じて、生徒一人ひとりの些細な変化に気付けるようにしていく。 ○スクールカウンセラーの存在を生徒全体にしっかりと周知し、相談ができる場所の提供を行っていく。 ○コロナ禍の中、生活様式の変化によって、生徒同士が関係性を築きにくい状況なので、授業や特別活動などを通じて、生徒同士の関係性が築けるようにしていく。
-----	--

3 学校経営の状況

□組織運営及び教職員研修の状況

(関連アンケート番号：教職員 5, 13, 14, 15, 18、生徒 4, 5、保護者 3)

取組	<ul style="list-style-type: none"> ○中高一貫教育を推進するため、中高の教職員が教育課程・教育内容・学校行事・生徒指導・進路指導等について企画・立案・実施・検証・改善を重ねるための機関として、「中高一貫企画推進会議」を定期的に（月1回）開催するとともに、その内容は職員会議で報告し全体で共有している。 ○中高合同で職員会議や職員研修会を開催し、本校の教育理念や教育目標に共有するとともに、中学校としても発達障害、生徒指導、教科指導等についての研修を行っている。 ○ベテラン及びミドルの教職員に対して適材適所の人事配置を行い、スムーズな学校運営を図っている。 ○平成29年度の開校に伴い、横浜サイエンスフロンティア高等学校・附属中学校の学校運営協議会を、年4回開催している。 ○常任スーパーアドバイザー及びスーパーアドバイザー、特別科学技術顧問、科学技術顧問、教育委員会事務局高校教育課、中高の管理職で構成する科学技術顧問会議を年1回開催している。 ○常任スーパーアドバイザー及び特別科学技術顧問、高校教育課指導主事、中高の管理職で構成する幹部会を月1回開催している。
----	--

<p style="text-align: center;">成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3年前から設置した学校保健委員会については、令和3年度もコロナ禍により開催できなかったが、生徒の発表を中心に今後も内容の充実を図っていく。 ○ 新学習指導要領全面実施における情報共有や、特に評価の研修等を定期的実施した結果、教職員アンケート項目「(研究・研修)教職員が互いに研鑽し、力量を高めることができるように、校内の研究・研修体制が整えられている」については74%が肯定的回答となっている。 (2ページ教職員アンケート18) ○ 科学技術顧問会議や学校運営協議会の開催により、大学や研究機関、企業との連携を進め、本校の特徴である文理融合型の科学教育を進める中で、「サイエンスの力」×「言葉の力」を育成する教育を推進する立場から具体的な提言と実行への積極的な協力を得ることができている。科学技術顧問等の協力・支援により、キリンビール横浜工場、京三製作所、JEFエンジニアリング、ANAシステムソリューション、横浜市立大学、東京農工大学等の協力による校外・校内研修や講話を実施し、科学・技術と現代の生活や環境、SDGs、コミュニケーション等について実践的に学ぶ機会を得ている。さらには、SSHによる中高連携の一環で、サタデーサイエンス特別編として様々な分野の講演の機会を設けた。 ○ 横浜市立中学校教育研究会等との連携を図り、本校の取組を広く発信している。 ○ 幹部会を開催し、常任スーパーアドバイザーや特別科学技術顧問に毎月取組や生徒の活動について報告するとともに、学校運営や教育内容の改善・充実及び生徒の健全育成についての助言を得て、学校の活性化を図ることができている。
--	---

<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○管理職を除く教員が 16 名のため、一人当たりの校務が多く、負担が大きいことが課題である。 ○中高それぞれの入学者選抜に係る業務において、昨年度に引き続きこれまでの経験を踏まえて調整をすることができ、教職員の負担を少し軽減することができた。今後は、業務マニュアル等を整理することにより、入学者選抜業務について中高で共有し、業務を調整しながら、教職員の負担をさらに軽減していくことが課題である。 ○教職員アンケート項目「（職員組織）一人ひとりの教職員が意欲をもって業務に取り組むことができる組織である」の経年変化を見ると、「十分に実現できている」との回答が 37%から 32%にさらに減少している。コロナ禍により先を見通すことが難しい状況が続き、効果的な教育の機会を失われる中でG I G A A スクール構想など新しい業務に取り組んでいることが影響していると考えられるが、分掌組織や会議の在り方を常に見直し、無駄な時間の削減により生まれた時間で教材研究や新たな行事の構築などの教職員のモチベーションを高められるタイムマネジメントが課題である。（2 ページ教職員アンケート 15） ○令和 3 年度はA E T ・学校司書・非常勤講師等が年度当初より配置されたが、引き続き学校司書や非常勤講師（令和 3 年度は 1 名減のまま）の円滑な配置をすることが課題である。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○I C T を活用し、教科指導における評価や他の校務において、業務の軽減ができるように、日頃より教職員のコミュニケーションを高め、O J T の日常化を図る。 ○教職員ひとり一人の研鑽のためにも、定期的な職員研修会を行い、本校の教育理念や教育目標を中高で共有しチームとしての研鑽につなげていく。 ○中高の入学者選抜に関わる業務において、それぞれのノウハウを生かし、スムーズな運営のため、教職員の業務の負担軽減のためにも業務マニュアルの改善、運営を行っていく。

□学校に関する情報公開の状況

（関連アンケート番号：教職員 27、保護者Ⅱ-5、生徒Ⅱ-5、地域 9）

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○夏の学校説明会をコロナ禍の中、感染対策を十分行ったうえで本校ホールで実施した。映像も w e b 上で配信した。 ○「Science Frontier Junior High School News」を発行し、学校の様子を外部に発信した。 ○ホームページの「YSFJH Diary」に校外研修など日々の学校生活の様子を随時掲載した。 ○学校案内パンフレットは生徒のキャッチフレーズや、新しい写真を掲載し、より良いものを仕上げた。 ○秋のオープンスクールや志願説明会では、新型コロナウイルス対策を考え参加人数を絞ったうえで体験授業や校内見学を実施した。
------------	--

成 果	<ul style="list-style-type: none"> ○夏の学校説明会では、1年生の代表生徒がYSFJHの良さを参加者に直接伝えるなど生徒目線での学校紹介を行った。 ○「Science Frontier Junior High School News」や「YSFJH Diary」を通して、特に本校の特色である「ほんもの体験」について外部に効果的に発信することができた。 ○学校案内パンフレットでは、写真を最新のものにアップデートしたり、生徒が考案したキャッチコピーを掲載したりするなどの工夫をして、受検を考えている児童や保護者に有効な情報を提供することができた。また、初年度から継続して使用していた表紙絵を変更した。 ○学校説明会・志願説明会等の告知や、「学校便り」の掲載等、本校に関わる情報をタイムリーに学校ウェブサイトに掲載することができた。 ○秋の志願説明会では、文化祭の中止などで、実際に校舎に入ることのない小学6年生とその保護者のために、校内見学を行うことができた。
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ○アンケートを見ると、地域の方への情報公開が不十分であることが読み取れる。文化祭等地域に開かれた学校行事が新型コロナウイルスの感染拡大のため中止になったこともあるが、地域への情報発信が今後の課題と考える。 ○ホームページの形式が開校6年を経過し古くなってきているので、内容の充実など工夫をして改善していきたい。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ○ホームページは、古いものを残さず、常に新しいものをアップデートできるように作業を進めるとともに、「YSFJH Diary」で学校の様子を随時掲載していることを地域の方へも発信し、情報提供していく。

4 いじめへの対応に関する項目

□いじめへの対応

(関連アンケート番号：教職員 28 生徒 I-4、5)

取 組	<ul style="list-style-type: none"> ○学校生活やいじめに関するアンケートを年4回実施するとともに、生徒一人ひとりと教育相談を行った。 ○YPアセスメントを活用して客観的に学級の現状を分析し、学校全体で情報の共有を図った。 ○いじめ防止対策委員会を毎月開催し、情報の共有を図った。 ○学年集会や学級において、いじめは絶対に許されない行為であることを教員から生徒に伝え、いじめに対して毅然とした態度で対応することを示した。
-----	--

<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○教育相談を担当だけでなく学年の多くの教員が行ったことで、教員と生徒の信頼関係を深めることができた。 ○全ての教科の授業でクロームブックを用いながら話し合い活動を行い、生徒同士が自分の意見を発信し、他の意見を受信することがスムーズに行われるようになってきた。 ○生徒に関わっている教員が綿密に情報交換を行うことで、生徒の些細な変化に気づき対応することができた。 ○いじめ行為や嫌がらせ事案に対して丁寧かつ継続的な指導を行ったことにより、そのような行為が継続しているという情報は無い。
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○SNSの利用によるトラブルが多いので、ネットリテラシーを含めた指導を継続して行う必要がある。 ○教員が「いじめは発生する」ということを常に意識し、指導及び支援を継続していく体制を整えることが必要である。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○年に一度実施している、サイバー犯罪防止教室の内容を精選し、SNSの使用の仕方を含めた指導を継続して行っていく。 ○コミュニケーションに関する研修や他者との関係についての道徳の授業などを通じ、適切な距離感で他者と関わることができるように指導をしていく。